

序

吉備池廃寺の発掘調査報告が完成しました。吉備池は、桜井市吉備にある江戸時代に築造された溜池ですが、その南岸には、二つの大きな土壇が向かい合うように並んでいます。しかし、調査以前には、これらが寺院の金堂と塔にあたることは、誰も想像さえしていませんでした。ただ、この付近では以前から瓦片が見つかっており、瓦窯跡とする見解や、地名に基づき、吉備氏の氏寺としての吉備寺を想定する説が提示されていました。性格についてははっきりしないものの、遺跡としては周知されていたのです。

奈良盆地には数多くの溜池がありますが、それらは計画的な保全整備がおこなわれています。吉備池でも北岸から護岸工事が進められ、1997年には、それが瓦の集中する部分におよぶこととなりました。そこで、奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会が共同で発掘調査をおこなったところ、この遺跡が7世紀の巨大な寺院跡であることが明らかとなりました。吉備池廃寺の発見です。

共同調査は、それから2001年まで5年間にわたって実施し、金堂・塔・回廊・中門・僧房などの遺構を確認しました。一方、これと並行して桜井市教育委員会・桜井市文化財協会が単独でおこなった発掘調査でも、僧房をはじめとする遺構を検出し、寺院周辺の状況が次第に判明しつつあります。そして、関係機関の努力が結実して、吉備池廃寺は2002年3月に国の史跡指定を受け、将来にわたって保存できるようになりました。

調査で明らかになった金堂基壇は間口37m・奥行約25m・高さ約2m、塔基壇は一辺約32m・高さ約2.8mという、当時としては破格の大きさです。とくに塔の平面規模や高さは、新羅の皇龍寺九重塔に比肩するものといえるでしょう。そうした堂塔の規模や、瓦の年代と出土状況などからみて、吉備池廃寺が、639年に創建された「百濟大寺」にあたることは確実と思われます。6世紀末に、最初の本格的寺院である飛鳥寺を建立してから半世紀ほどのうちに、このような巨大な仏寺の建設を可能とした技術上の進歩、あるいはそれを必要とし

た政治的・宗教的な理由とは、いったい何だったのでしょうか。

従来、古代の建築については、法隆寺をはじめとする7世紀後半以降の現存建築から、発掘した遺構の上部構造を推定してきました。しかし、吉備池廃寺のような巨大な堂塔の設計には、中小の建物の単純な拡大ではとうてい対応できない要素があったようです。塔に関していえば、私たちはこれまでに、東大寺西塔・藤原京大官大寺塔の発掘資料を得ています。今回、それに吉備池廃寺（百済大寺）塔、さらには最近発掘された平城京大安寺西塔の資料を加え、古代における巨大建築の再吟味が可能となったわけですが、本書は、こうした面においても多くの問題を提起するものとなるでしょう。

なお、このたびは、調査終了後約2年間という短期間のうちに、報告書の出版にこぎつけました。私どもにとって、これは大きな成果です。遺跡の重要性や保存措置の緊急性などの要因も作用したとはいえ、ひとえに発掘担当者ならびに報告書執筆者・編集者の努力の賜といわねばなりません。あわせて、当研究所の事業に対し、側面から惜しみない援助をいただいた奈良県教育委員会・桜井市教育委員会・桜井市文化財協会に、心から御礼申し上げます。

最後に、本報告書を基礎資料として、今後の研究が大きく飛躍することを願うとともに、文化財保護が少しでも前進することを期待いたします。

2003年3月

奈良文化財研究所
所長 町田 章